初めてのASCOと天変地異

名古屋大学医学部 消化器外科 教授　小寺 泰弘

台風や降雪に加え、ここ数年、ゲリラ豪雨でも新幹線が止まるようになった。一昨年であったか、大雨の予報の中で東京に出かけようとした時のことだが、職場を出る時はポツリポツリの降り方で傘さえさしていなかったのに、そこから各駅停車でわずか２駅先の名古屋駅に着いた時には様相が一変していて、何と新幹線が止まっているということで、ホームの下の待合室周辺に人があふれていた。信じがたいという思いで、何はともあれホームに出ようとしたが、ホームの両サイドで停車車両に降りつける雨がはねてホームの真ん中辺まで届いてしまう状態でホームは水浸しであり、早々に階下まで退却せざるを得なかった。出張の理由となっているイベントの主催者サイドの２名も京都から東京に向かおうとしている状況にあったので、すぐに携帯で連絡を取りイベントの中止を進言したが、京都ではまったく天候に問題なくこれから新幹線に乗るところだとのことで、私の説得も虚しくイベントは予定通りにとの連絡が入った。やむなくそのまま名古屋駅で待機していたが、結局その列車も京都で停車したきり動き出すことはできなかった模様で、やがて暗い声でイベント中止との連絡が入った。それみたことかと思ったが、その時の凄まじい降り方は、こりゃあ新幹線が止まるのも無理はないと十分に納得できるものであった。わが国ではこういう時に駅員さんはひたすら謝るばかりであり、お詫びの放送も何度も繰り返されるのだけど、実際問題として彼らには責任はないのではないだろうか。まあ、冷暖房も切れてしまった状態で、復旧の見通しについての情報が何ら与えられないまま何時間も車内に缶詰めにされたとなれば、その対応については大いに謝罪の必要があるケースもあるかとは思うが。

かれこれ20年前のことになるだろうか、生まれて初めて米国に一人旅をした。New Orleans で開催される米国腫瘍学会（ASCO）に出席するための旅で、格安チケットを握りしめての往路のフライトは Dallas-Fortworth 経由であった。天候不良のため Dallas-Fortworth 上空を延々と旋回して着陸が２時間以上遅れ、乗り換えが……と焦りつつ入国し、トランクを再度預け、セキュリティーを通過して国内線の待合に入ったところで掲示板を見ると、自分が乗るはずの New Orleans 行きのフライトは何と運航中止となっていた。「頭が真っ白」以外に表現の方法がない。カウンターで状況を聞くと、当日の夜20時（その時点からさらに10時間後）の便は既に満席で、しかも翌日は休日なので午前中の便はなく、翌日夜の便なら何とか押し込めると、白髪の女性が申し訳なさそうに言う。初日から綿密に聴講のためのスケジュールを立てていた初めての ASCO である。そんなに遅れてはあれも聴けない、これも聴けないと、極めて生真面目な理由でパニックになった私は、何が何でも今夜のフライトに乗らねばならないと言い張った。白髪の女性は憐れみを隠し切れない目でこちらを見ながら「ダメもとでキャンセル待ちを入れておきますね」と言って私の名前を端末に入力してくれた。

その後の10時間はファストフードで空腹を満たしたりガイドブックや抄録集を紐解いたりして何とかやり過ごしたが、いよいよ20時になって搭乗口付近に出向いても、およそこれから飛行機が飛ぶという気配は感じられない。そのうちにアナウンスが流れ、機材の到着が遅れていて、一体何時に出発できるか見当がつかないとのこと。飛行機がさらに遅れるだけならこの際かまわないけれど、こちらはその便に乗れるかどうかすらわからないキャンセル待ちの身である。このままでは空港で一晩を過ごすことになりかねない。合衆国は治安が悪いとイメージしていた一人旅の私としては、それだけは何としてで

も避けたかった。クレームや質問を受け付ける窓口があったのでそこに並んだが、長蛇の列の前の方に並んでいる人たちの様子を見ていると、会話中に一瞬でも言いよどむと「Next!」の一言で次の人に順番を譲り、追い払われている様子であった。こんな様子では、私の語学力では精いっぱいまくし立てても限界があるに決まっており、実際に5秒と持ちこたえられずに「Next!」と宣告されてすごすごと撤退し、列の最後尾に並びなおす羽目になった。質問の機会1回につきひとつ質問に答えてもらえればそれでよいのだと開き直り、何度か並び、何度か「Next!」と怒鳴られる中で断片的に得た情報によれば、最悪の場合には航空会社が空港周辺のホテルを斡旋するが、機材の故障など航空会社側の責任で起きていることではないので、ホテル代は自腹になるとのことであった。いずれにしても持ち場を離れると致命傷を負いそうなので、頑張って引き続き搭乗口付近に張り付いていたところ、23時くらいに機材が到着したらしく、それに乗っていたと思われる乗客が疲労困憊の表情を浮かべながら次々に搭乗口から吐き出されてきた。どうやら搭乗口も到着口も同じ導線のようだ。そしていよいよ審判が下される時刻となり、祈りをささげながらさらに待ち続け、ついに搭乗口付近のカウンターから“passenger Kodera”と呼ばれた時は、疲労と安堵のために気を失いそうであった。New Orleansに降りたのは午前3時に近かったが、こんな旅程になってしまっていては、預けた荷物がすんなり出てくるとは思えなかったし、こんな時間にタクシーはいるのかとか、ドタキャン状態になっているはずのホテルは大丈夫なのかとか、何せ初めての一人旅なので心配は尽きなかった。しかし、奇跡的にトランクはあっさりと出てくるし、タクシーはすぐにつかまって、運転手の黒人のおばちゃんが鼻歌を歌いながら「ハーイ、New Orleansは初めてかい？　何がここの名物か知ってる？」などと、とんでもない時間帯なのに何事もなかったかのように陽気に話しかけてくる。ようやく運が向いてきたような感覚であった。それまでのトラブルがまるで嘘のように順調にチェックインも終わってベッドに入るまでに、成田を出てから何時間はりつめた緊張状態の中で起きていたことになるのだろうか……。

ここまでは結構つらい思い出となったが、結局ASCOには当初の予定通りに出席でき、大変楽しく有意義であった。その年のASCOでの胃癌領域の目玉はV326 study（進行再発胃癌における5FU/CDDPに対するdocetaxelの上乗せ効果が証明された第Ⅲ相試験）であったように記憶しているが、その当時、薬物療法の世界は分子標的治療薬の黎明期に入っていた。ZD1839という薬剤の固形癌に対する臨床試験の結果が奏効例のCT画像付きでASCO newsのトップで扱われていた。後にイレッサとして販売されることになるその薬については、残念ながら現在私が専門とする消化器癌では使用されていない。しかしその当時は、分子標的治療薬の台頭で癌の治療も大きく変わるに違いないと、大いなる高揚感を覚えたものである。こうした新しい薬剤やエビデンスとの出合いとは別に、学会の規模が衝撃的であった。oral sessionに選ばれるのはわずか数名だが、発表会場は優に1,000人は入れそうであり、6枚の巨大スクリーンが会場の前後に3枚ずつ並び、両サイドのスクリーンにはスライドが、中央部のスクリーンには発表者がアップで上映される（写真1）。コンサートに例えれば、通常の学会はつつましい室内楽の演奏会、これは東京ドームで上演されるグランドオペラという雰囲気である。このような会場が満員に膨れ上がり、発表者は緊張を隠し切れず、discussantの充実した分析・論評がこれに続く。一方、基礎研究の教育セッションなどは臨床中心のこの学会では希少なのだが、それだけに厳選された内容であり、遺伝子signature、EMTなどというその後何年も論じられることになる概念の多くはここで学んだ。Bad news issueなど、患者さんに悪い知らせをどのように伝えるかなどという講習を初めて受けたのもこの学会であり、極めてpracticalかつ教育的な側面もあった。消防法の関係で立ち見は許されないので、会場が満杯と見るや速やかに別会場での同時上演が準備され、立ち見の会員は小走りにそちらに誘導される。いろいろな意味で、内容も、運営も、素晴らしいものであった。この学会を中心にいかに大きな金が動いているか、そして私たちミーハーな参加者がどれだけ売り上げに貢献しているかは、後日また別途知るところとなるのだが、日本の学会も見習うべきところは多いと感じたもの

写真1　ASCO の oral session の光景

である。なお、夜はケイジャンフードとジャズ三昧で、時差ボケも吹っ飛ぶほどであった。

ところで、この New Orleans 行きの飛行機を降りる時の機内放送が忘れられない。お詫びなどは一切ない。天候の異常は航空会社の責任ではないからだ。“We thank you very much for your patience and cooperation”という結びの言葉で、私たち乗客は、忍耐と協力を感謝された。その放送をした CA の高揚した口調には、乗員、乗客、航空会社が一体となって、共に今回の自然災害がもたらした試練を乗り越えましたねという達成感がにじんでいた。そういえば、Dallas-Fortworth 空港の搭乗口付近で私たちの搭乗券をチェックしていたお姉さんも、「まったくねえ、私たちも家に帰るのがむっちゃ遅くなっちゃって本当に迷惑しているわ」と、とある乗客に語っていたのだった。そうですね。ひどい目にあったのは乗客だけではないんですよね。

JR も、時速300km 近くで走行する列車が数分おきに発車する過密なスケジュールであるにもかかわらず、連日あれだけ精密かつ安全に新幹線を運行している。これはすっかり有名になった車内清掃の手際の良さ同様に、世界でもトップクラスのサービスである。自然災害についてまで低姿勢で謝る必要はないのではないかと思えてならない。